

専門の垣根を越えて連携を

# 野生動物に関する六つの誤解

シカ、イノシシ、サルといった野生動物が町中で見かけられるという。そのことは人々の生活にも影響を与えている。

野生動物の管理を研究する鈴木正嗣さんは、その現状認識に「誤解」も多いという。「誤解」を紐解きながら、課題を探る。

岐阜大学応用生物科学部教授

## 鈴木正嗣

●すずき・まさつぐ 1961年生まれ。帯広畜産大学畜産学部獣医学科卒、北海道大学博士（獣医学）。専門は獣医学、野生動物管理学。北海道大学助教授などを経て現職。共著に『野生動物管理のための狩猟学』（朝倉書店）、『増補版 野生動物管理—理論と技術』（文永堂出版）。

### 開発が原因という誤解

——野生動物の状況については誤解が多いと指摘されています。

まず、断っておきたいのは、誤解している人の多くは、不勉強で無関心な人ではなく、むしろ自然環境問題をまじめに考え、取り組んでいる人たちが多いということです。悪意

もなく、知識もあるので、かえって固定化してしまった自分の考えから脱けだせない側面がありますね。

——確かに環境問題を考えるとき、自然保護が開発かと、単純な対立構図に陥りやすいと感じます。

野生動物に関しても、さまざまな要因があります。単純な構図はわかりやすい一方、誤解を招きやすい。一つひとつ紐解いていくことが大事

だと考えています。

——具体的にどんな誤解があるのでしようか？

高度経済成長期の乱開発により多くの自然が失われ野生動物が激減した、あるいは、野生動物が町中に現れることが増えたのは山にエサがなくなつたため、という見方があります。農学系大学の導入教育レベルの参考書にもこのような記述がありま

す。しかし、これは誤解を招きかない表現です。

——それはどんな理由ですか？

要因の多くは別のところにあります。確かに転機は高度経済成長期で

すが、野生動物が増えたのは、乱開発というよりも、中山間地域から人の撤退が進んだためなのです。一九六〇年代までは、いわゆる里山が日本のいたるところにありました。建

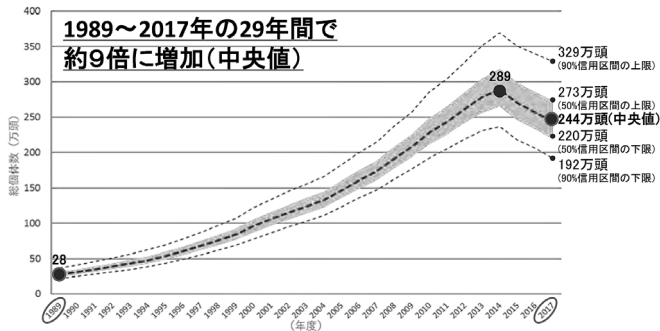
材をはじめ、生活に必要なものは里山から調達していたのです。

ところが高度経済成長期に入ると、化石燃料や化学肥料が普及し、それによって日本人の暮らしに変化もたらされました。里山から物資を調達する必要がなくなり、地方の過疎化と相まって、人の手が入っていた里山は「森」へと変化し、「奥山」になっていったのです。つまり高度経済成長期を境に、人の管理が行き届かない山林が増えて野生動物の生育環境は好転し、シカやイノシシ、カモシカ、サル、カワウなどは息域を拡大していったのです。

この「好転」が、ある種の動物たちを急速に増やしていくことになりました。農村部は過疎化し、高齢化していくなかで、急増した野生動物による農作物への被害は著しく増える。このような状況は、高齢化して

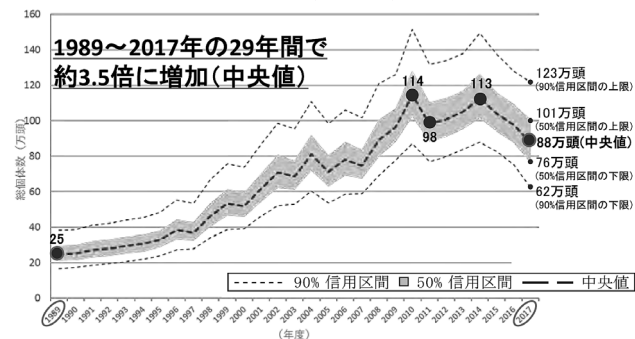
### シカ、イノシシの推定個体数推移

〈シカ〉（北海道を除く）



※2017年度（H29年度）の北海道の推定個体数は約66万頭。

〈イノシシ〉



（出典）「全国のニホンジカ及びイノシシの個体数推定等の結果について（令和元年度）」（環境省）